

第21回

# 私の古典学習法

本誌編集委員

熊坂 尚史 〈前編〉

学生時代、古典から手本をつくることを学んだ



初めて書の古典に触れたのは高校に入  
学して、書道部に入部したことがきっか  
けでした。書道をより深く学ぶため、大  
学の書道学科に進学して多くの先生方に  
古典の学び方をご教授いただきました。  
二回の連載の前編では、学生時代にど  
んな古典にどのように向き合ったのかを、  
後編では現在取り組んでいる古典から創  
作への展開方法、書論書道史の学び、教  
育現場での古典学習の取り組みについて  
書いていきたいと思えます。

## ― 基本古典の臨書に没頭する

私の通った千葉東高校は、書道教育にとて  
も熱心な学校でした。文検習字科（文部省教  
員検定試験）に合格して全日本書写書道教育  
研究会において指導的立場で活躍された初代  
安塚旭洞先生が永らく教鞭を執られていて、

私の入学時はご子息の安塚正明（二代目旭洞）先生が書道部顧問をされていました。

当時、体が弱く、運動部への入部を医者から止められていた私は、小学生のころ書道教室に通ったことがあるからという安易な動機で書道部に入りました。

入部してまず書かされたのが初唐の三大家の一人、歐陽詢の「九成宮醴泉銘」です。

まずは半紙に横画のみ、次に縦画、そして転折、左右の払い、基本点画。できるようにすると半紙に二文字で全臨です。書道室の本棚には二玄社の『書跡名品叢刊』がそろっていました。

二文字で全臨したら半紙で四文字の全臨。そして次は原寸大の臨書です。

図1は入部してから約三ヶ月後の、六月三十日付の落款がある全臨です。五十時間くらいかかった記憶があります。決して上手ではありませんが、およそ一三〇〇年前の古人と少しだけ通じ合えた感覚を覚えました。そしてこれが私の初めての古典学習体験でした。

秋の文化祭を終えると、日本武道館主催の全日本書初め大展覧会の練習に入ります。書道部の先輩方が一年生の個性に合わせて、制作の基盤となる古典を紹介してくださるなかで、私は「高野切第三種」（次頁図2）を学ぶことになりました。

なぜそうなったのかははっきりと記憶にはないのですが、たぶん行草や篆隷に興味がある同級生がいたため、消去法で私は、仮名に

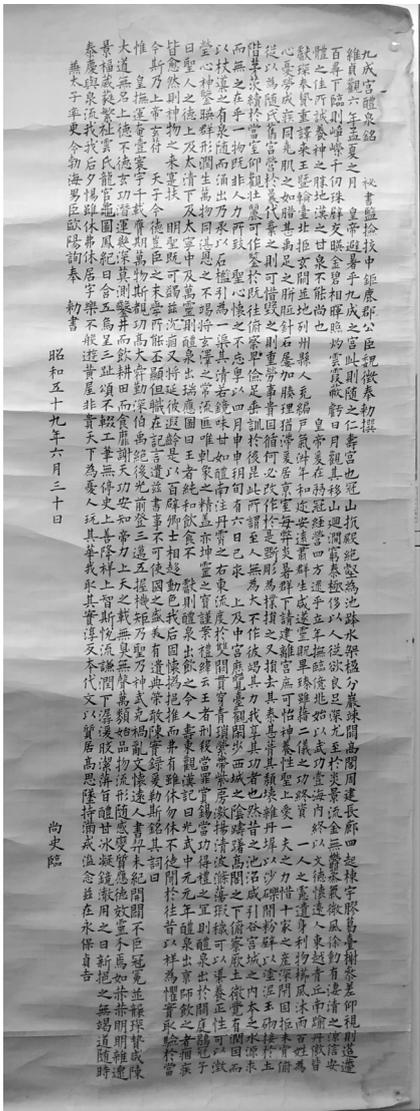


図1 高一 入部して三ヶ月後に書いた「九成宮醴泉銘」の全臨

取り組むことになったのだと思います。

原寸の臨書から入ったのですが、もともと手先がそれほど器用ではなかった私は小筆の扱いに非常に手こずりました。また曲線の多い字形をどう捉えて良いのか分からず、何度

プロフィール



熊坂 尚史（くまさか・なおふみ）

昭和43年 東京都生まれ

〈略歴〉

平成2年 東京学芸大学教育学部特別教員養成課程

書道学科卒業

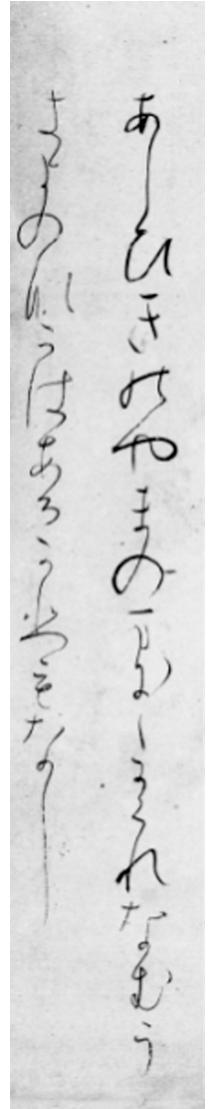
桐朋中・高等学校講師を経て平成5年より巣鴨中・

高等学校教諭・芸術科主任（現職）

〈所属等〉

- 日本武道館発行『月刊書写書道』編集委員・手本揮毫・解説執筆、日本書道教育協会発行『現代書写』
- 手本執筆、謙慎書道会理事、全国大学書写書道学会
- 会員、明治神宮書道委員会、書論書道史研究会委員、
- 文部科学省検定高等学校書道教科書指導書（執筆・
- 校閲）、書道東龍文会会岩井秀樹社中（会員、書道熊
- 笹会（仙台教室）・筆っ子連真名かな（池袋教室）
- 主宰、サローネ・フレスコ習字教室（麻布十番教室）
- 講師。

図2 「高野切第三種」より



全日本書初め大展覽会で入賞した時の作品

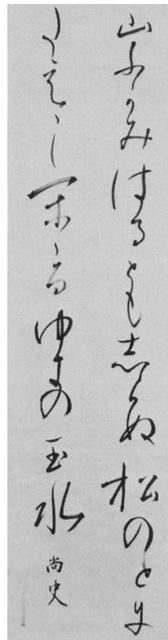


図3 高1 山ふかみ春とも知らぬ松の戸に  
たえだえかかる雪の玉水 尚史

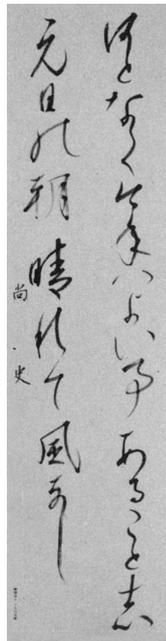


図4 高2 何となく今年はよい事あるごとし  
元日の朝晴れて風無し

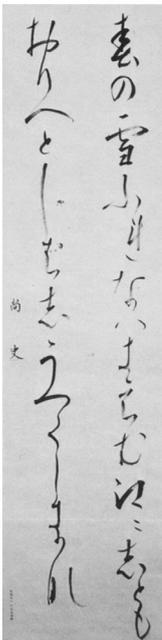


図5 高3 春の雪ふれなばきえむえにしとも  
思へどしばしうつくしきかな



図6 米市「蜀素帖」肉筆で書かれた行書  
として高等学校書道IIで採り上げら  
れることも多い

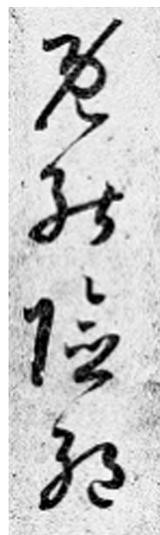


図7 孫過庭「書譜」変化に富む用筆・運  
筆で書かれた書論。内容も優れる

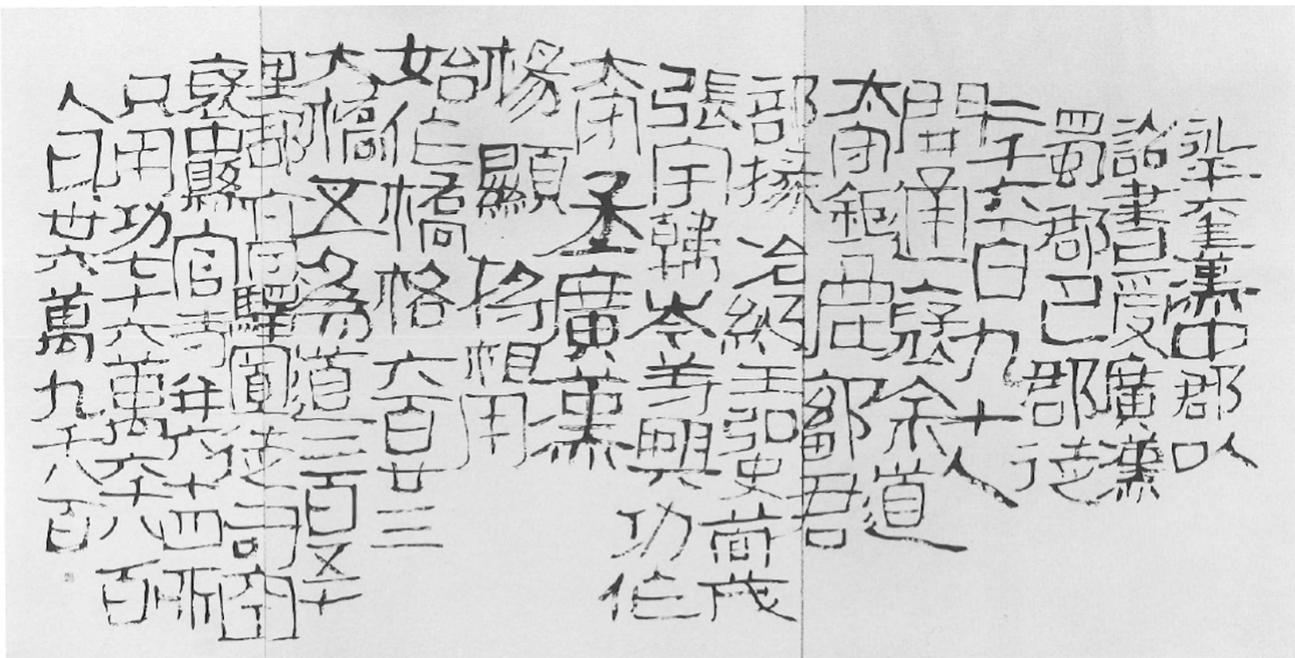


小臣餘義尊



図8 金文「小臣餘義尊」殷代末期のサ  
イの形をした青銅器。タイトルと左  
の解説は小木先生のメモ

図9 第三十九期卒業生制作展  
「臨開通褒斜道刻石」



臨開通褒斜道刻石 260×496cm

図10 無意識の中で生まれてきた  
作品「未成年誕生」



も試行錯誤を繰り返しました。  
二玄社の法帖をコピーして、縦横に細かく方眼紙のように補助線を入れて、とにかく似た形になるように臨書を繰り返しました。  
一通り原寸での臨書を終えると、漢字の「九成宮醴泉銘」のときは逆に、半切用紙に拡大臨書をします。最終的には書初めの課題語句を書かなければならないのですが、まずは「原帖」をかなり大きく拡大コピーをし

て貼り合わせ、拡大手本を作り、それを見ながら半切用紙に書いてみます。

始めのうちにはどんな線で書けばよいのか見当もつきませんでした。「九成宮醴泉銘」の臨書で少しだけ身につけた、張りのある側筆を用いてなんとか紙面を持たせられるようになり、それを応用して集字をして席書大会に臨み、幸い三年連続で入賞することができました(十頁図3〜5)。

高校時代に「書はお稽古事ではなく、自ら古典と向き合い、手本は自分で作るものだ」という基本姿勢を覚えていただけたことは何事にも代え難い体験だったと思っています。

## II 古典学習の幅を広げた大学時代

進学した東京学芸大学書道学科でご教授いただいた先生方と、今でも印象に残っている古典は次の通りです。

加藤東陽先生から「九成宮醴泉銘」を中心に楷書法を習いました。優しい語り口ですが細やかな分析でした。

長野竹軒先生には教科教育法を中心にご教授いただきました。合宿の時に見せていただいたご自身が学生時代に書かれた「張猛龍碑」の全臨に圧倒されました。

相川鐵崖先生には米芾の「蜀素帖」や孫過庭の「書譜」を何度も全臨させていただきました（十頁図6・7）。

小木太法先生には篆隸を教えていただきました。十頁図8はその時のプリントです。漢字の字源を探る「文字学」というものをこのとき初めて知りました。

中村閑葉先生の懸腕法で書かれる「寸松庵色紙」は、何度まねをしようとしても不器用な私にはかなり難しいものでした。もっと努力しておけばよかったと反省しています。

他に篆刻の古川悟先生や仮名の藤木正次先生、日本書道史の古谷稔先生、特別講習では石川九楊先生など、思い返せば錚々たる顔ぶれの方々にご指導いただきました。

東京学芸大学の先生方は、それが伝統なのでしよう、作品を見せると丁寧に批評してくださいのですが、お手本は書いてくれません。たまに「自分ならこう解釈します」と範書を示してくださいることはありましたが、あくまでも古典を手本にしなさいという指導でした。

素晴らしい先生方や先輩後輩級友達に囲まれ、これ以上無いくらい恵まれた学生生活を過ごしました。大学に入学して初めて知った「古隸」に特に興味を持つようになり、四年次に小木太法先生の研究室に入り卒業制作に臨みました。

「臨開通褒斜道刻石」は縦二六〇cm×横四九六cmの大作です（十一頁図9）。その二年後に書いた「未成年誕生」（十一頁図10）は、シンカーソングライター尾崎豊さんの訃報を知り、失意の中で筆が勝手に動き、たった一枚で生まれた書です。明らかに「開通褒斜道刻石」のイメージのもとに書かれているように思われるのですが、どうしてこのような表現をしたのか自分でも分かりません。そしてこの作品以降、古典から距離を置く時期がしばらく続きました……。

### III 古典を離れた時代

「私の古典学習法」のテーマから外れてしまうので簡単に記します。

大学を卒業して「人の一生はあまりにも儂い」と感じ、自身が心臓病だったこともあり「明日もしれない我が命」と浮き足立ちました。焦燥感のただ中、早く自分だけの「世界一人の道」（図11）を見つけようとして、いろいろな表現に挑戦したりもしたのですが、どこか満たされないものも感じていました。

しかし、その時の自分ではそれ以上どうすることも出来ませんでした。未熟な私は卒業後、中島敦の『山月記』の虎さながらに、師



図11 「世界一人の道」

### IV 古典回歸く仮名の世界へ

にもつかずきちんと古典とも向き合わない、まさに「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」の時代でした。

その後、不惑を過ぎても書作の方向性が定まらない私に岩井秀樹先生（聖徳大学教授・読売書法展常任理事・日展特選二回）を紹介してくれたのは高校の二年上の先輩である小倉太郎先生（聖徳大准教授）でした。私が高校時代に仮名に熱中していたのを知っていたのでしよう。「岩井先生の門を叩いて、本気で仮名をやってみたらどうだ」と入門の段取りをしてくれたのです。

そして、そのことを契機として不遜であった私の眼からうろこが落ち、鼻が折れ、私は仮名書の世界にどっぷりはまっていくことになるのです。続きは後編で！